心肺蘇生法に神様は必要か？

　その場の誰もが、まるで金縛りにでもなったかのように身動き一つすることなく、ただ目の前の光景をジッと見つめていた。月明かりが照らす中、瞬の体の上で人の姿を形作る黄緑色の光は、まるでその場にスポットライトが当たっているかのように、妖精モドキとテュポーンの目を釘付けにしている。

　やがてその光は、瞬の体のすぐ近くに移動して舞い降りた。刹那、その光が周囲に弾け飛ぶ。

突然の出来事に、妖精モドキとテュポーンは思わず自身の腕で顔を隠す。

「あ……あぁ……」

　だが、その腕の隙間から覗き見ていた妖精モドキの口からは、そんな声が漏れ出ていた。

　光が弾けた所には、瞬と同じくらいの年頃の、一人の女の子がいた。黄緑色のロングコートと白いシャツ、黄色いスカートと焦げ茶色のブーツを身に纏っている。ロングコートは二の腕の部分だけ肌を露出させており、スカートは、ちょっと危ない所が見えそうなくらいミニミニだ。

　だがそんな所より目を引くのは、背中に斜めに掛かっている銀色の長剣と、彼女の容姿であろう。ウェーブの掛かった、肩のあたりまで伸びた黒髪は、夜風に揺れて艶やかに煌めいて彼女の顔を隠している。それでも、髪の隙間から覗く色白の肌と、目を閉じて、どこか憂いているような表情の美しさは、例え僅かしか見えなくても、世の中の男の心を惑わすには充分な破壊力があった。

　地上に舞い降りた彼女は、暫く夜風の感触を全身いっぱいに堪能すると、閉じていた目をゆっくりと開き、黒く光る瞳が露わになる。一瞬空を見上げると、そのまま妖精モドキとテュポーンの方に顔を向けた。

　その姿は、妖精モドキの探している『護衛対象』と非常に酷似しているが、それは間違っている。なぜならば――

「……ゼウス様」

　彼女はさっきまで妖精モドキがずっと探していた人物そのものなのだから。

「……勝手なことをしちゃって、ごめんね？」

　ゼウスは妖精モドキの言葉に、ちょっと苦笑しながらそう言った。文句を言いたげに頬を膨らませる妖精モドキに、『やっちゃった』というようにペロッと舌を出す。

「色々言いたいことはあるんだけど、こいつをやっつけてから全部話すから、ちょっと待ってて」

　背中の長剣を抜きながら、ゼウスは自分を見つめるテュポーンを睨みつける。ガードの中心に、黄色い宝石と緑色の宝石が両側に小さくはめられた長剣を敵に向けると、ゼウスの黒い瞳が緑色に輝いた。

　テュポーンはそんなゼウスに少し後ずさるが、すぐに左腕の鎌を振りかぶり、蛇の尻尾が地面を蹴った。

　だが、その鎌が振り下ろされる事はなかった。同じく突進したゼウスが、既にテュポーンのガラ空きの胴体に長剣を突き刺していたからだ。容易く腹を貫いた剣は、テュポーンの血で濡れている。

　それでもまだ息があるテュポーンの生命力にゼウスは関心しながらも、緑色に光らせた瞳を今度は金色に染めた。その瞬間、長剣に電流が走り、テュポーンの体が痙攣を始める。振り上げていた鎌が力を失ったようにダランと下に下がった。

「不思議……何か、体が凄く軽い。力が湧き出てくる……」

　そう呟くと、ゼウスはようやくテュポーンの体から剣を抜く。既に黒い煙が体から立ち上っているが、テュポーンは体を崩すこと無く、それでも未だゼウスを睨んでいた。どうやら、全身に電流が走っても尚、生命活動は終わっていないらしい。ゼウスは少し眉を八の字にすると、少し距離をとった。長剣を背中の鞘に収めて、両手の平をテュポーンに突き出す。どうやら、次で終わらせるらしい。敵の姿を映すその眼は、左右で色が違う。瞳を緑色と金色に光らせて、ゼウスは詠唱を始めた。

「神の下に命じます。の爪よ、の槍よ、仇なす者を切り裂き、貫け！　！」

　刹那、ゼウスの頭上に雷で出来た細長い槍が現れる。全長は実に三メートル程。そして緑色の風が、空間を切り裂くように槍の穂に纏っていた。穂先は僅かに揺れ動いてはいるものの、それでもテュポーンに狙いを定めている。

　そして――

「いけっ！」

　ゼウスの声と共に、猛スピードで雷と風の槍がテュポーンの体を貫いた。場所は、さっきゼウスが長剣で突き刺した所の少し真上。本当はドンピシャで同じ所を貫くつもりが、ちょっと狙いがズレてしまい、彼女は肩を落とす。

　槍に貫かれたテュポーンは、抵抗しようともがいていた。しかしそれが原因か、まるでひび割れるかのように全身に亀裂が入る。それに気が付いたのかピタリと動きを止めるテュポーンだったが、もう遅い。まるでガラスが崩れるかのような音を立てて、叫び声を上げる間も無く四散した。

「……ふぅ、終わった……のかな？」

　同時に槍も宵闇に消えると、ゼウスはホッと体の力を抜く。さっきの技で疲れたのか、その場にズルズルとへたり込んだ。

「あ……あの……」

　だが、そんな彼女に近づき、声をかける人物が一人。さっきの戦いの中、目の前の光景にボーッと見入っていた妖精モドキだった。その表情は、ようやく会えた事を喜んでいるのが半分。戸惑っているのが半分といったところだろう。今までどこに行っていたのか、瞬の体から出てきたように見えたのは何故か、その他もろもろも含め、妖精モドキにはさっぱり分からなかったからだ。

「ごめんね？　全部話すから」

　それを今の遠慮がちに発せられた言葉で悟ったのか、ゼウスは妖精モドキを抱き寄せて、頭を撫でながら、どうしてこうなったのか、説明を始めた。